

テニソンの『ユリシリーズ』

一

テニソンの劇的独白『ユリシリーズ』(“Ulysses”)は、彼の最も優れた詩の一つに数えられている。テニソンの詩全体について、かなり否定的な批判をあたえている最近の批評家マイヘッド(Robin Mayhead)でさえ、この詩を「きわめて決定的な成功⁽¹⁾」と呼ぶことを躊躇しない。しかし、この詩を、どういう意味で「成功」と呼ぶかという解釈の段になると、批評家の意見は大きく二つに分れる。解釈の分れるところは、この劇的独白の語り手ユリシリーズを、テニソン自身の分身と見做すか、すなわち人の体験詩人の体験に、密着した主観的な作品と考える

山田泰司

か、それとも審美的距離(aesthetic distance)を十分に置いて詩とは直接かかわりなく、客観的に把握された作品と見做すかに、主としてかかっているように思われる。

ここで詩人の体験というのは、テニソンがこの詩の製作事情について語るところによれば、一八三三年、無二の親友アーサー・ハラム(Arthur Hallam)を失ったことによる虚脱感と、それから立ちなおろうとする決意を指す。テニソンの息子ハラム・テニソン(Hallam Tennyson)は父の言葉を次のように伝えている。

『ユリシリーズ』は、アーサー・ハラムの死の直後に書かれたもので、前進し人生の苦闘に立ち向う必要についての私の気持を、『イン・メモリアム』のどの

詩よりも恐らく素直に述べたものである。⁽²⁾

また、同じ趣旨のことを、テニソンはノウルズ (Sir James Knowles) に次のように語っている。

『ユリシーズ』は、喪失感と、すべての物は過ぎ去った、しかし最後まで人生を戦い抜かねばならないという思いをこめて書かれたものです。この詩の中には『インメモリアム』におけるよりも私自身のことがよく出ています。それは『イン・メモリアム』の中の多くの詩よりも、深く彼 (Hアーサー・ハラム) を失ったという思いをこめて書かれたものです。⁽³⁾

製作事情について、このようにはっきりした詩人自身の説明があたえられている以上、これを考慮に入れて『ユリシーズ』を読むことは一応当然のことと言えよう。すると、この詩はブッシュ (Douglas Bush) のいう「英雄的剛毅と決意」⁽⁴⁾の詩となり、またバクレー (Jerome Hamilton Buckley) の評するよう「明らかに最も断固たる詩」⁽⁵⁾という受け取り方が普通になる。その他、ほとんどすべての解釈・註釈がハラムの死を背景に置いてこのように読んでいるのに対して、わずかにホートン (Walter E. Houghton) とロバート・スタンジ (G. Robert Stange)

の『ヴィクトリア朝詩選』のみが、その註釈で、さきのテニソンの言葉を引用しながらも「この詩はまた経験を經驗それ自体のために求めて気を晴らすことによって、人生の苦闘から逃れたいという願望をも伝えている」と注意しているのが注目を引く。またブランデン (Brand and Blunden) 編の最近の『テニソン選』はその序文において、テニソンが息子に語った、さきの言葉をそのまま肯定的に引用しているが、註では「テニソン自身の、人生に対する態度についての発言の一つ」と述べている。⁽⁷⁾

伝記的要素を全く考慮に入れなくて論じているものはきわめて少なく、目に止ったところではただ一つ、ラングバウム (Robert Langbaum) の所論のみで、彼は「テニソンについて最も特徴的なのは人生に対する、ある種の倦怠感と、忘却を通して休息にあこがれる心である」⁽⁸⁾として、『ユリシーズ』もその例外でないかのごとく論じている。

一篇の詩が読む人の接し方によって、さまざまの異なった反応を引き起すことは何等不思議ではない。ブレイク (William Blake) のような象徴詩にあっては、むしろ

当然のことであろう。しかしテニソンのこの詩のよう
に、一見するところ平明な詩が、これほど対立した解釈
を引き出すのは、いさか異常のことと言わねばならな
い。それは、これらの解釈がいずれもラングバウムのそ
れを除いて、製作事情についての、テニソン自身の説明
にあまりにもよいかかって、この詩そのものに虚心に接
していないからではあるまいか。ラングバウムにして
も、テニソンの詩全体についてのさきに引用したとき
先入感があつて、この先入感を無理に『ユリシーズ』の
中に読みこんでいるうらみがある。従来の特ニソン研究
が比較的実り少なかったのは、いわゆるテニソンのな
の、乃至はヴィクトリア朝的なものについての予定概念
が出来上つてしまつていて、多分にそれに翻弄されてい
たからであるように思われる。テニソンを新鮮な目で眺
めるためには、何よりもまず、彼の詩そのものの中に、
彼の本質の最も深い部分を求めなければならぬと思
う。本稿は伝記的事項を考慮外に置いての、『ユリシー
ズ』の解釈による、その一つの試みである。

二

『ユリシーズ』は劇的独白である。『前公爵夫人』(The
Last Duchess)の語り手である公爵がブラウニング(Ro-
bert Browning)自身でなく、アルフレッド・プルーフ
ック(Alfred Puffrock)がエリオット(T. S. Eliot)自
身ではないと同様に、ユリシーズはテニソン自身ではな
い。伝記的要素によりかかった解釈の多くが犯している
初歩的な誤りは、ユリシーズとテニソンを同一視して
いることである。テニソンはユリシーズに、その役には
まった声で語らせているにすぎないのであつて、この人
物の語る言葉に必ずしも同意してはいないのである。

ここで大切なのは、ユリシーズの言葉の語調である。
狡猾な彼は、一見相手かまわず自己主張しているように
見えながら、その実、聞き手を強く意識している。彼の
言葉には、当然、ある種のひねり、屈折がある。ひねり
のあるこの語調を正しくとらえることこそ、この詩の意
味を解く鍵である。まず最初の五行を検討しよう。

It little profits that an idle king,

By this still hearth, among these barren crags,

Match'd with an aged wife, I mete and dole

Unequal laws unto a savage race,
That hoard, and sleep, and feed, and know not
me.

(くだらぬことだ、無為の王として、

この静かな炉辺に、この不毛の岩山で、

老いたる妻とつれそって、このわしが貯え、眠り、

食らい、わしを知らぬ野蠻族に、

不平等な法律をちびちび施しているのは。)

トロイ戦争に参加、十七年の後にやっと帰還して、これから大いに領民のために尽すべきユリシーズは、自己を「ひまで仕事のない」(idle)と規定する。彼には領民に奉仕する気持など全くないのである。わが家は「静か」(still)、「つまり家庭生活は退屈なものであり、島なる王国、美しいイサカ(Ithaca)の国は、彼にとって是不毛の岩山にすぎない。よく空閑を守ってきた妻ペネロペ(Penelope)は「老妻」と片附けられ、彼女との結婚生活は'matchid'という非情の一語につきる。'mete and dole'という二つの動詞にも領民に対する軽べつの念と、自分を小売商人にでもなぞらえる、自己憐憫の響

きがある。彼には思い切った善政を施す考えなど毛頭ないのである。法律は平等であるべきものが貯え、眠り、食らうだけの野蠻族たる領民に平等に法律が施行できるものか。わしがトロイ戦争でどれ程の武勲を立てた英雄であるかを知らぬ領民どもに対しては、わしの都合のよいように法律を操るだけだ。

ユリシーズはこの五行で、故国、妻、領民について独語しているわけであるが、そのすべてに対して、ただ軽べつだけを感じているのである。語調はあくまで冷笑的であって、彼の傲慢な性格がのぞいている。読者はユリシーズのこうした性格を念頭に置き、これと照らし合わせて、三十三行以下、領民および同行を勧誘される仲間への演説を読まなければならぬのに、これを忘れてユリシーズの弁舌に酔ってしまう。それほどテニソンが語らせるユリシーズの弁舌は魅惑的だと言えるのではあるが、この五行に明らかに示されたユリシーズの性格を正しく把握せずに読み進むことは、この詩全体の解釈をゆがめてしまう。

同じく独語ではあるが、第六行からはトーンが変化する。ユリシーズは自分の過去の業績に対するあこがれと

共に、島国の王に甘んじていることに焦燥を覚える。神からあたえられた現在を充実させて余生を送ろうという意志は彼にはない。過去の夢が、常に定めなき未来へと彼をかり立てる。新しいもの、現在とはちがった何物かを、彼はしきりに追ひ求める。「人生の盃を飲み干そう」(「I will drink/Life to the lees」と彼は言う。しかし彼は現在そうしているわけではない。彼は現在に生きることはできないたちなのだ。

all times I have enjoy'd
Greatly, have suffer'd greatly...
(いつも、わしは大いに楽しみ、
大いに苦しんだ...))

と言うが、いつも未来へとかり立てられている彼が、過去が現在であったとき、本当にこの言葉の通りであったかどうか、「大いに」という副詞は単にレトリックとしてつけ加えられたかに響くのである。

ついで、自分の豊かな過去の体験を誇らしげに、調子の高い言葉で語るにあたって、彼は自分の冒険精神のい

わば犠牲になった、亡き部下の運命については、これになつかしむ言葉を一言も述べていない。「わしは名をあげた」(「I am become a name」)、「すべての者から尊敬された」(「honour'd of them all」)と、全く自画自讃に終始している。

I am a part of all that I have met;
(わしは遭遇したあらゆるものの一部だ)

と言いながら「飢えた心で常にをまよほう」(「always roaming with a hungry heart」) エリニースは、すべ、だが、しかし、と言葉を続ける。

Yet all experience is an arch wherethro'
Gleams that untravell'd world, whose margin fades
For ever and for ever when I move.
(だが、すべての経験は、それを通して
あの訪れられざる世界、永久に進むにつれて
その端のかすれゆく、あの世界が
ほのめく、アーチなのだ。)

この有名な三行は、経験を求めることの誘惑を物語ると同時に、それを常に求めることのある種の空しさをも暗示する。そしてユリシーズの悲劇への手がかりをもあたえてくれる。「アーチ」という単語は消えかかる虹の端のごときものを暗示し、'clean' という動詞には、あこがれに伴う悲哀感がこもり、「訪れられざる世界」、およびそれ以下の原語の発音には、特に口や舌をいろいろ働かせなければならず、「永久に」という言葉を繰返したところにも、達成し難い願望を読者に微妙に意識させる。さらにこの箇所は、『ハムレット』の

the undiscover'd country from whose bourne no
traveller returns

(その国境よりだれ一人旅人の戻り来ぬ未知の国)

という文句を想い起させる。さらに彼は

Life piled on life

Were all too little, and of one to me

Little remains.

(いくたび生を重ねたとて、とても足りなからうが
わしは老い先短い身だ。)

と嘆く。彼は神からあたえられた人間の命運に安んずることができない。神ならぬ身の人間には、やがて命運の尽きるときが来るのだ、という認識を素直に受け入れるだけの大人らしい悟りを持つことができない。子供っぽい願望を抱いて、ただいたずらに生の短かさをかこつだけである。

また、「あたかも息をすることが生きることでもあるかのごとく」(as tho' to breathe were life) なすところなく一生を終えるのは退屈だ、と言うが、生きるとは、目的も信ずるところもなく、無意味な奮闘を続けることではあるまい。ユリシーズに欠けているものは、すべての努力に意味をあたえる人生の大目的なり、信仰なりであって、テニソンは主として、ユリシーズのような人生態度に対して読者の非難が向けられるようユリシーズに語らせていると見られる。彼の勇氣も、奮闘も、探求心も、いわば第二的な美德であって、これらを方向づけ

る目的なり信仰なりが欠けていては無意味であるばかりでなく、それらが高慢、奸智、人間的暖か味の欠如などの重大な欠陥によって支えられている以上、危険で破壊的でさえあるのである。さらにユリシーズにとっては死とは「すべての終り」(Death closes all)であり、永遠の沈黙(That eternal silence)であって、靈魂の不滅とか来世に対する信仰を彼は拒否する。少なくともそれに全く関心を示さない。ところが、テニソンにとっては『イン・メモリアム』において明らかなように、靈魂の不滅こそ、この世における人間の生を意味づける唯一の拠り所であった。ユリシーズがテニソン自身の思想の代弁者であるがごとく解するのはいわれないことだと言わねばならない。

ユリシーズは堂々たるレトリックを弄しながら、テニソンによって、その一語一語に、自己の人的欠陥をさらけ出させられている。古い先の短いユリシーズは「更に何物か」(something more)、「新しいもの」(new things)を求めて止まないが、それは所有の見栄のためであり、子供のようにな新奇を求める心かられたことであって、それによって自分の生活に何等かの意味を加

えようというのではない。経験と共に彼は知識を求める。

To follow knowledge like a sinking star
Beyond the utmost bound of human thought.

(沈みゆく星のじとき知識を追い求め
人間の思考のきわみを越えて行く。)

「沈みゆく星」とはさきの「訪れられざる世界」云々のイメージの延長である。彼が求める知識は常に地平線の彼方に消えてゆくのであり、「沈みゆく」(sinking)という動詞によって、テニソンは、ユリシーズがわが身にもたらす永遠の墮獄を暗示しているように思われる。知識は人間を高めるものとしては示されていない。この二行は、ユリシーズにとっては、知識への癒されることのない憧憬のイメージであるが、読者には、フォースタス(Faustus)的な、分を越えた知識欲にとりつかれた人間の悲劇を述べたものと映るのである。

ここまで読み進むと、テニソンがユリシーズなる人物について、読者に肯定、否定のいずれの態度をとることを求めているかが明白になる。この詩は、詩人が正面切

って自己の信念を披歴したものではない。テニソンとユリシーズとの関係がどうであろうと、詩人はユリシーズとの間に、はっきりした距離を置いて書いたことだけは間違いない。この詩が非常にしばしば、テニソン自身の信念の表白のごとく読まれてきた理由の一つは、その中に、それだけを単独に取り上げれば、われわれがテニソンに求めることを常とする調べ高く美しい文句が数々ちりばめられているからであらう。油断していると、読者はユリシーズのレトリックにすっかり酔わされてしまいい、この結局は卑しむべき人物に、不当な讃辞を呈したくなるのである。劇的独白にあつては、強烈な個性をもつ悪人を語り手として、これを尤もらしく見せ、読者の共感をかち得るように描き出すとき、その最大の効果を發揮すること、ブラウニングの『前公爵夫人』の場合と同じである。その点、『ユリシーズ』という詩も、心にくいまでに成功していると言えよう。

第三十三行目から四十三行までの十一行は、故国を再びあとにするにあたって、領民の代表に息子テレマカス(Telemachus)を紹介するくだりである。ここには、すでに最初の段落においてあからさまに見せつけられた、

人間的暖か味の欠如が、今度は陰微の間に、しかし実に巧妙に現われている。冒頭の五行に見られた耳障りな硬い言葉とは反対に、ここで用いられている単語は一樣に柔らかな響きをもち、領民に巧みに取り入る語調がそれとなくうかがえる。第一段落においてユリシーズの性格の何たるかをすでに知っている読者には、この十一行のもつアイロニカルな調子がすぐ感知できるのであるが、このスピーチだけを聞く領民たちには感付かれないのである。

すでに接しているユリシーズの高慢な口調に照らして見れば、「余が深く愛する」(well-loved of me)と「う、わが子にそえた形容辞も空ろに響く。独語の際の「野蛮族」(a savage race)を言い代えて、領民を「気骨ある人民」(a rugged people)と呼んでみても、それは応対上手、かけひきのうまさを示すにすぎない。この領民を和らげ、しずめて「有用にして善良なる生業」(the useful and the good)に就かせるだけの明敏さをわが子は備えているという。有用とか善良は、ひたすら経験を求め、知識にあこがれるユリシーズのかかわり知らぬところ、軽べつするところなのに、本心と裏腹なことを悪び

れもせずに言つてのける彼の狡猾を、まぢまぢと見せつけられる。ならに、

Most blameless is he, centred in the sphere

Of common duties, decent not fail

In offices of tenderness, and pay

Meet adoration to my household gods

When I am gone. He works his work, I mine.

(わが子はまことに見上げたもの、

わが去りしのは、日々の職分に専心し

孝養の勤め怠りなく、わが家の守り神に

ふさわしき祈りを捧げよう。

彼は彼、余は余の務めにはげむ。)

欲望の赴くところ、領主としての責任を回避して旅立つユリシイズである。わしは息子などとは次元を異にする人間なのだ、息子には精々この程度の仕事をやらせて置けばよいのだ、という思いついた気持ちを裏返しにして述べたものと読みとれる。わしには老妻をいたわることなど御免だ、そんなことは息子に任せれば済むこと。いか

なる神をも敬ったことのないわしに、今更、わが家の守り神のごとき小神を拝んでいられるものか、冒険心にかられるわしが、そんな家庭的な瑣事にかかずらうていられるものか、という慢心が裏にあるのである。一分の隙も見せない見事なアイロニー。

第四十四行から始まる最後の段落は、シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』(Julius Caesar)のアントニー(Antony)の演説にも比すべき部分である。ユリシイズはアントニーほど表立って扇動的でないだけに、いっそう危険な人物である。ユリシイズは、生き残って彼と共に老い、このたびの船出にあまり気乗りのしない部下の者たちを、なだめすかして何とか誘い出さねばならない。したがってアントニーの場合よりも、もっと心に染み入るような、静かな口調で説得にかからなければならぬ。彼の言葉は沈痛の響きを帯びる。まず、彼は情景描写という常套手段に訴える。

There lies the port: the vessel puffs her sail:

There gloom the dark broad seas.

(あれは港町だ、船は帆をふくらませます。

向うに暮れゆくのは、暗い広い海だ。

これは短い三つのショットで全景を浮び上らせる映画の手法である。'gloom' と 'dark' の二語で前途の危険を、'puffs' という動詞で船出の用意のできたことを、'broad' で行く手定めぬ船路を予想させる。単なる風景描写ではない。

じつは、ユリシーズは「わが海の勇士たち」(My mariners) と呼びかけて、部下の心を揺り動かそうとする。その際、例によって、修辭的にも心理的にも趣向を凝らす。

'wrought and thought' — 類韻 (assonance)
 'The thunder and the sunshine' — 対句 (antithesis)
 'Free hearts, free foreheads' — 繰返し
 'you and I are old' — 感傷への訴え
 'Death closes all' — 威嚇
 'Some work... may yet be done' — 前途の望み
 'men that strove with Gods' — 自負心への訴え

わずか八行のうちに、これだけあらゆる技巧を盛り込むユリシーズの弁舌は非凡である。

あとは再び情景描写に移る——思わず引き込まれるようなリズムと音を存分に駆使して。

The lights begin to twinkle from the rocks:
 The long day wanes: the slow moon climbs: the deep
 Moans round with many voices.

(町の灯りが岩間からきらめき始める。)

長かった一日も暮れ、月がゆっくりと昇る。

わたつみは、あたりに声繁くうめく。)

見事な音象徴 (sound symbolism) である。第一行は短母音を主として点々と灯りのともるさまを、第二、三行は長母音を主に響かせて、ゆっくりと夕闇が迫り、海鳴りの高まるさまを描く。この音とリズムの魔術は理性をしびれさす。そしてユリシーズが

Come, my friends.

(いざ、わが友どちよ。)

と呼びかける頃には、老水夫たちの心は、完全に彼の掌握するところとなる。読者も、こうして巧妙極まる誘いの言葉を操る人物が、その実、いかなる性格の持主であったかを、またしても、つい忘れそうになる。だが、この呼びかけに読けて「さらに新しい世界を求めるのに遅すぎることはない」とお座なりの、格言めいた言葉を吐き、「船を出せ、整然と位置に就いて漕ぎいませ」と号令してから

for my purpose holds

To sail beyond the sunset, and the baths

Of all the western stars, until I die.

(日の没するところ、西方の星のことごとく

ゆあみする彼方を越えて、命の尽きるまで

舟をやらんとする、わが目的は動かぬぞ。)

と宣言するとき、ユリシーズが相変らず例の利己的な考え方にそって語っていることに気づかせられる。すべて

は自分の目的 ('my purpose') を遂げ、自分が死ぬまで ('until I die') のこと、要するに自己の欲望を満たすためのものなのである。老水夫たちに「友よ」と親しく呼びかけているが、実は彼らを自分の欲望の奴隷並に扱っているのである。また「日没」にせよ、「西方」にせよ、死或いは廃退を連想させる言葉であることに注意したい——死出の旅なのだ。さきの「訪れられざる世界」、「沈みゆく星」のイメージの延長であることは勿論である。

It may be that the gulfs will wash us down:

It may be we shall touch the Happy Isles.....

海の藻屑になろうと、極楽浄土に辿り着こうと、運まかせ、経験のために経験を求めるユリシーズにとっては、どうでもいいことなのだ。至福と不幸とを事もなげに同列に並べる彼の無責任な態度はどうであろう。次いで亡き勇士アキレス ('the great Achilles') にまみえることもあろうと言うが、彼の名を出したのは、まだ万一起るかも知れない、船出に対する反対に止めを刺すためでもあろうか。

また、神々に対するユリシーズの不満と反抗は、演説の終りの数行の中に再び含まれている。「多くのものが、われわれから奪い去られたが」(‘Tho’ much is taken from us’)、「地と天を揺がした」(‘moved earth and heaven’)、「時と運命に弱められはしたが」(‘made weak by time and fate’)、とびつた言葉の中に、それが暗示されている。彼にはどこまでも天なり命なりとあきらめることはできないのである。「われらかくのごとき者」(‘that which we are, we are’)という言葉にも神々と運命に対する挑戦的な語気がうかがえる。そして、この演説を

To strive, to seek, to find, and not to yield.
(はげみ、求め、そして屈しなむ。)

と単音節語を並べた力強い一行で結ぶのであるが、一体、何に「はげみ」(または何と「戦い」、何を「求め」、何に「屈しない」というのであろうか。要するに、対象も目的もまたない努力奮闘、信仰なき精進を説いているにすぎないのである。

ユリシーズは地獄に落ちる七つの罪惡の第一に位する

もの——高慢にとりつかれている人間である。いかに堂々たる弁舌をもって、それを見せまいとしても、それは語調に、言葉の端々に微妙にあらわれる。言葉に技巧を凝らせば凝らすほど、彼は自分の意図する以上に聞き手に本音をもらしてしまふのである。

三

以上、冒頭の五行がこの詩のトーンを決定するものとして、伝記的要素を考慮外に置いて解釈に筋を通してみた。この解釈によれば、ユリシーズなる人物は、まことに魅力的ではあるが、テニソン研究家の多くが考えるような高邁な性格ではなくて、高慢で度し難い詭弁家ということにならう。では、テニソン自身が「この詩の中には『イン・メモリアム』におけるよりも私自身のことがよく表わされている」といっている言葉をどう処理すべきであろうか。テニソンの説明は、この詩が書かれて何十年も経ってから語られたものであり、この詩についての薄れた記憶に頼っているため、或いは製作当時の気持を完全に伝えていないのかも知れない。親友ハラムを失って一時人生の拠り所を失ったかに思われたときの悲しみ

は、ユリシーズの死への言及にうかがえよう。ラングバウムの言う「人生に対する倦怠感と休息へのあこがれ」は、確かにところどころに顔を出している。しかし、これを、『ユリシーズ』の主導的情緒と呼ぶには、他の要素が勝ちすぎている。利己的意図をもってであるにせよ、奮闘的生活への勧めが、はっきりと打ち出されている。この詩の解釈の分れるところは、この情緒——それは何よりもこの詩の沈痛なリズムによく現われている——と、言葉の外延的意味である向上への強い意志とのいずれに重きを置いて読むかにかかっている。この二つを調和させて解釈することは難しい。強いて言えば、絶望から立ち上ろうとする、目的定めぬあがきをうたったものでも解することもできよう。ヴィクトリア朝知識人の思想は、今日のわれわれが想像するように定着したものでは決してなかった。ダーウィン (Charles Darwin) の進化論によって宗教の権威は揺らぎ、科学の著しい進歩は恩恵ばかりでなく、種々の弊害をもたらした。ヴィクトリア朝知識人は、後退してモリス (William Morris) のように中世の安定した社会に逃れるか、自分たちをどこへ連れて行くかきわめ難い進歩の波に身をまかせるか、

その選択に迷っていた。こうした、その生きる時代に対する愛憎半ばする気持を、この詩はうたっているのだとも見られる。時代に対する、絶望と信頼との相半ばする複雑な感じ方を。

ヴィクトリア朝という時代のコンテキストに置いて読めば、この詩はそのように解することもできる。しかし本稿では詩以外のすべての要因を考慮に入れずに解してみた。製作当時のテニソンの意図は、テニソン自身の作詩後の説明によっても、決して決定的に解明することはできないし、従来のテニソン研究は、あまりにもテニソンのなものについての先入感によって損われていたと思われるからである。本稿における試みによって或程度うかがえるようにテニソンという詩人は決して単純な情緒のみをうたう詩人ではなくて、その詩の狙いは案外複雑だったのである。

- (1) 'From Dickens to Hardy,' *The Pelican Guide to English Literature* (1958), p. 231.
- (2) Hallan Tennyson: *Tennyson, a Memoir* (1897), I, p. 196.
- (3) Sir James Knowles, "Aspects of Tennyson."

- Nineteenth Century*, XXXIII (1893), p. 182.
- (4) Douglas Bush: *Mythology and the Romantic Tradition in English Poetry* (1937), p. 210.
- (5) J. H. Buckley: *Tennyson, The Growth of a Poet* (1960), p. 60.
- (6) Houghton and Stange: *Victorian Poetry and Poetics* (1959), p. 32.
- (7) Edmund Blunden: *Selected Poems of Tennyson* (1960), p. 152.
- (8) Robert Langbaum: *The Dramatic Monologue in Modern Literary Tradition* (1957), p. 90.
- (1) 聖大講義